

4554 富士製薬工業

今井 博文 (イマイ ヒロフミ)

富士製薬工業株式会社代表取締役社長

中期経営計画の仕上げに向けて独自の企業価値の向上に努める

◆2014年9月期第2四半期決算(連結)の概要

当上期の連結決算については、売上高は141億78百万円(前年同期比21億82百万円増)、粗利率は42.7%(同1ポイント減)、販管費は44億90百万円(同8億56百万円増)、営業利益は15億61百万円(同48百万円減)、四半期純利益は10億2百万円(同86百万円減)となった。

営業利益は、売上増に伴い粗利が増加した一方で、研究開発費の増加、通期の連結開始に伴う子会社の販管費の増加、のれん代の償却の増加により、前年同期より48百万円減の15億61百万円となったが、予算比では1億51百万円ほど上回った。

薬効別の売上高を見ると、診断用薬は、オイパロミン注が31億78百万円(前年同期比1億95百万円減)、イオパーク注が8億85百万円(同92百万円減)に対して、今期新たに投入したブランド薬オプチレイ注が7億60百万円の寄与をしたことにより、診断用薬合計では50億97百万円(同4億75百万円増)となった。ホルモン剤も、主力のルナベル配合錠が16億88百万円(同4億59百万円増)のほか、女性医療向けのHMG、フォリルモン等排卵誘発剤、ファボワール等の経口避妊剤などの寄与により、47億6百万円(同9億78百万円増)となった。

医療領域別の売上高を見ると、急性期医療は75億71百万円(前年同期比5億84百万円増)で、主にDPC対象病院向けの実績となっている。女性医療は47億10百万円(同10億90百万円増)となった。今後はバイオシミラーのフィルグラスチムの実績を引き上げるとともに、女性医療については、ジェネリックと新薬のシナジーモデルをつくることに注力しており、徐々に実績が上がっている。

当上期の貸借対照表について、当上期末の総資産額は414億12百万円(前期末比22億74百万円増)、純資産は247億85百万円(同7億18百万円増)となり、自己資本比率は59.8%となった。

資産の部では、売上増加に伴う売上債権の増加、ERP導入に伴う会計方針の変更、承継品や販売移管品の取り扱い開始によるたな卸資産の増加により、流動資産は前期末より20億89百万円増加し、258億61百万円となった。一方、負債の部では、たな卸資産の増加に伴い仕入債務が増えて、流動負債は前期末より19億46百万円増加し、108億64百万円となった。

キャッシュフロー計算書については、当上期末における現金および現金同等物の残高は61億28百万円となった。営業活動によるキャッシュフローは、仕入債務の増加などにより15億73百万円の収入となった。投資活動によるキャッシュフローは、前年同期は子会社買収に伴う支出など大きな設備投資による支出があったが、当上期は大型の投資等は実施していないため、前年同期に比べて大きく減少し、12億11百万円の支出となった。財務活動によるキャッシュフローは、前年同期に借り入れた買収資金の返済、配当金の支払いなどにより7億71百万円の支出となった。

◆2014年9月期業績予想(連結)

売上高については、今期新たに投入したオプチレイ注などブランド薬5製品で25億円、新薬のルナベル配合錠

で6億円、子会社のCMO事業で5億50百万円、バイオシミラーで4億10百万円などの増加により、前期比42億90百万円を上乗せして、17%増の294億円、粗利率は前期とほぼ同程度の43.8%を見込んでいる。

販売管理費は、オプチレイ注の販売移管に伴う費用が5億75百万円の上乗せ、研究開発費は5億55百万円の増加となり、販管費全体では前期比23%増の見込み。営業利益は34億50百万円、5.8%の増加にとどまり、当期純利益は横ばいと見込んでいる。

◆2014年9月期は中期計画総括の年度

これまで当社は、「会社設立50年までに、既存コア事業の拡大と、次の時代につなぐ新規事業機会の具体化を実現すること」を重点課題として取り組んできたが、第50期である2014年9月期は、現行の中期経営計画の最終年度、総括の年度となる。

中期経営計画の基本方針の第1に、注射剤に資源を集中投入、急性期医療の充実では、この下期から、抗がん剤と一般製剤をマルチで製造する世界初の注射剤製造ラインの立ち上げを予定している。新たにオプチレイ注で18億90百万円、バイオシミラーのフィルグラステムBS注6億60百万円など、急性期医療については、2014年9月期合計で163億円、16%の増加を計画している。

第2に、女性医療のリーディング・カンパニーの実現では、今期、生殖補助医療用のホルモン剤新薬の治験を開始した。女性医療については、新薬のルナベル配合錠で35億70百万円、新たに承継・販売移管したブランド薬4製品は6億10百万円、ジェネリックの経口避妊剤約7億円など、今期は合計で94億20百万円、前期比18%増を見込んでいる。

第3に、東南アジアで最大の医薬品製造機能の構築では、タイOLIC社で20数億円の投資を計画し、新注射剤工場棟と新物流倉庫棟の建築に着手している。また、OLIC社のCMO事業は17億70百万円を見込んでいる。

今後とも、この中期の経営計画の仕上げに向けて、われわれの強み、特化している領域に集中し、独自の企業価値の向上に努めたい。

◆質疑応答◆

オプチレイ注や塩野義製薬から承継・販売移管した4製剤の販売状況はどうか。

4製剤の販売に関しては、塩野義製薬の販売量をほぼ維持、もしくは少し上回っており、大きく数量を減らすような状況ではない。オプチレイ注は、バイエル、第一三共、エーザイが市場で競合しており、引継時に幾つかの施設を落としたため若干数量は減ったが、数量を回復させる販売計画を立てている。

御社初のバイオシミラーG-CSF製剤発売後の手応えはどうか。

G-CSF製剤は、処方されている施設がかなり限られている。先行品の売上の80%は600弱の施設におさまっている状況だが、約3割程度の施設はバイオシミラーの導入を進めており、ポテンシャルの大きな施設が既に採用に踏み切る、もしくは採用の検討に入っている状況にある。

バイオシミラー製剤に関しては、国内では、成長ホルモン、エリスロポエチン製剤は他社が先行して進めてきたが、この2製剤に比べて立ち上がりは非常に早いとわれわれは判断している。

G-CSFは、化学療法における支持療法に用いる製剤で、直接的な抗がん剤ではないが、4社が営業展開し、市場が刺激されている。われわれも、昨年5月末に販売を開始するかなり以前からバイオシミラーの啓発を積極的に展開しており、採用につながりつつある。数量はまだ低いですが、今後は拡大すると考えている。

4 社の中でも日本化薬はかなり強いと思うが、どう見ているか。

発売から約1年たつが、バイオシミラー市場の70%程度を富士製薬工業と持田製薬が占めている。国内での治験がかなり多くの施設で評価されており、また、国内で製造が行われている点を先生方に評価いただいていることもあるので、この状況が今後大きく変わることはないように取り組みたい。

マルチ製剤製造ラインの設備投資額は、一般の注射剤のラインよりかなり割高か。

倍ぐらいの投資はしている。

DPC のジェネリック促進策の影響はあるか。

われわれは経口剤を主としていないため、影響がないように思われるかもしれないが、今回 DPC の機能評価係数にジェネリックの比率が導入されたことは、われわれにとっても大きなインパクトがあるととらえている。DPC 施設でも、ジェネリックに関して、経口剤の検討とともに注射剤の検討も進めている状況で、特にリマプロストは顕著な増加傾向にある。

DPC でも今後ジェネリックの競争が激化してくると思うが、御社の戦略はあるか。

ジェネリックの他社は、単価が安い経口剤の出荷を大幅に増やしている。われわれは従来どおり、あまり競争のない注射剤を軸にして今後も事業展開をはかっていきたい。

われわれはジェネリックではほとんどのシェアを持っているが、DPC での採用割合は約 6 割強なので、まだ引き上げる余地はある。

今回ルナベル配合錠が増加したのは、新しく出た超低用量(ULD)の貢献によるものか。

ルナベル配合錠は前年同期比で約 4 億 60 百万の増加となっており、その半分弱が超低用量の増加額である。従来の LD 錠も前年同期比で 20%伸びている。2014 年 9 月から長期投与が解禁されるので、今後は ULD の比率が増えていくと想定している。

上期赤字のタイ OLIC 社だが、下期にこの回復を見込む理由について伺いたい。

OLIC 社は完全な受注生産で、たまたま当社の決算年度では下期に受注が偏っている。特に主要上位 5 社の計画の多くがこの 4 月以降に偏っているので、結果的には下期にはやや回復する見込みだ。

新しく立ち上げるタイの注射剤工場では、どのように受託ビジネスを展開していくのか。

注射剤工場の立ち上げは 2017 年になる。富山からの一部移管と、注射剤の受託事業の引き上げを考えている。

東南アジアでは注射剤の供給先が限定されているので、注射剤の製造受託の需要がある。小容量から大容量までの注射剤を生産できるラインの構築を考えており、注射剤については幅広く受注できる準備を進めている。また、造影剤のバイアルの製剤は、3 年後に富山工場から移管する準備を始めている。

人件費等も富山工場に比べかなり安く、競争優位性がある。今後、特に競争力が必要な製剤については、造影剤を初めタイに移管することを考えている。

黄体ホルモンの腔剤のフェーズⅢ終了をあすか製薬が発表し、申請準備に入ったと聞いたが、御社の開発の状況を伺いたい。

弊社の臨床試験はあと数カ月で終わる予定で、申請時期は年末を予定している。あすか製薬より少し遅れる可能性はある。

(平成 26 年 5 月 16 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見ることができます。

http://www.fujipharma.jp/ir/library/meeting_data.html